エキセントリック・パーティー

中村 呂美兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エキセントリック・パーティー

【Ｎコード】
Ｎ５６７２Ｕ

【作者名】
中村　呂美兎

【あらすじ】
とある王国の後宮制度により、姉が後宮入りすることに。「害虫共からお姉さまを守って見せるわ！」と侍女に扮して後宮に潜入する主人公エミリア。右も左も分からない状態で始まった後宮生活だったが、そこで出逢う王子たちは皆変わり者で…？
口の達者な田舎貴族のお姫様と、風変わりな王子様たちの奇想天外ラブコメディー！！

第００１話　父の話

目の前に落ちていた物を見て、少女は言った。

「嫌だわ。またこんな所にゴミを捨てていったりして。ウチはゴミ捨て場じゃないってのよ、まったく！」

少女はそれを拾い上げると、くしゃくしゃっと丸めて服の中に押し込んだ。
簡素なドレスを身にまとった少女は、銀色に輝く髪を風になびかせ歩き始める。
国内でも珍しい銀色の髪は、太陽の光に当たると尚輝いた。

「エミリアー、そろそろお昼の時間よ。どこにいるの？」

中庭の方から少女――――エミリアを呼ぶ声がして、エミリアは振り返る。

「お姉さま、こっちよ。正門のところにいるわ」

エミリアが叫ぶと、一人の女がこちらに向かって歩いてきた。
エミリアの姉、フローラだ。
フローラはエミリアとは違って、髪の色は柔らかな栗色。

優しげな容貌と相まって、ふわふわとウェーブした髪型がよく似合う。
しかも美人で、気立てもよく、なにより優しい。エミリア自慢の姉だ。

「まぁ、こんな所で何をしていたのかしら。また家を抜け出そうと考えていたのではないでしょうね？」
「違うわよ。馬鹿ね、お姉さまったら。抜け出すんだったら正門なんて使うわけないじゃない。人気のない南門を利用するわよ」
「…そう、ならこれからはジダンに南の門を見張らせなくちゃね」
「あっ……」

完全なる墓穴である。
姉とは違い、活発で天真爛漫な性格のエミリアは、小さな頃からよくいたずらをしては両親や姉を困らせてきた。
今年で１６歳になる今でもその性格は変わらず、両親の悩みの種なんだとか。

特に最近のブームは、家を抜け出し、町娘に扮し町を散策すること。
しかし、くしくも髪の色が一般的ではないのですぐにバレてしまうのである。
領主であるウォーカー家の娘が銀髪であることを町の皆は知っているし、天真爛漫だということも知っている。
だからこそと言うべきか、貴族でありながら飾らない彼女は町人に絶大な人気がある。

「おや、お二人ともここにいらっしゃいましたか。探しましたよ」

「ジダン！」

金色の髪がよく似合う、見目麗しい青年が二人の元へ歩いてきた。
ウォーカー家専属の騎士で、エミリアのお世話係（というよりお目付け役）も兼任している、ジダン・ハーレイである。

「ねぇジダン。今日はせっかく天気もいいし、また剣の稽古をつけて頂戴よ」
「またですか？駄目です。危ないですから」
「どうしてよ。私、これでも上達してきてるじゃないの」
「だからですよ、エミリア。手加減できないくらい上達しているから危険なんです」

なんてことを言われて、エミリアはちょっとだけ眉を寄せた。
普通なら喜んでいいはずなのだが、エミリアはそんな手に騙されたりはしない。

「嘘ね。どうせお母様あたりから言われているんでしょ？」
「……」

図星らしい。
わかり易くも、ジダンはご丁寧にエミリアから視線を外し空中に泳がせている。
そんなジダンの様子に、フローラは口元に手を当てクスクスと笑い、エミリアは呆れ顔でジダンに言った。

「ねぇ、ジダン。あなた、もう少し嘘つくの上手になった方がいいわ。それじゃバレバレだし、なによりちょっと可愛過ぎよ」
「……余計なお世話です。というより、エミリアが嘘つくの上手すぎるんです」
「あら、私は嘘なんてついてないわ。話をちょっとはしょったり、大げさにしたりしているだけよ。全くのでたらめは言ってないわ」
「……」
「あら、何よその目は？」

その時、エミリアは将来大物になるんじゃないかと、ジダンは思ったという。

◇◆◇◆◇

それは、家族での夕食の時間のことだった。

「今宵、お前たちには大事な話がある」

父が真剣な顔でエミリアとフローラを見た。
母も手にハンカチを持ち、なにやら口元に当てている。
何事かと思った。

「急にどうしたのよ、お父様。もしかして、領地剥奪とか！？もしくは爵位の剥奪！？まさか処刑なんて言わないわよね？？！！」
「話が飛びすぎだ、エミリア。私がそんなヘマすると思うか？」
「思うわ。だってお父様ったらこの前、庭園で猫を見たとき犬だとおっしゃったじゃない。あの時はとうとうボケが始まったんだと涙がこぼれたわ」
「あ、あれは、たまたまそう見えただけだろう。もう随分前の話だ」
「つい3日前ことよ！」
「……とは言っても、たったそれだけの事だろう？」
「いいえ、お父様。まだあるわ。そうアレは昨日の…」
「もういい」

父は気を取り直すかのように「うぉっほん」咳払いをすると、再び真剣な顔に戻る。

「お父様、そんな真剣なお顔やめてください。笑ってしまいそうよ」
「エミリア、お前はもう黙っていなさい。それと、この顔は雰囲気作りだ。我慢しなさい」

そして父は、大事な話とやらを話し始めた。

第００２話　国王勅命

父の話によると、内容はこう。

『王国の後宮制度により、ウォーカー伯爵家よりフローラ・ウォーカーを後宮に迎えることが決定した。３日後、城より迎えが来るので準備しておくように』

エミリアはその話を聞いて、部屋に戻った後すぐに怒りをあらわにした。

「なんて虫のいいお話かしら。何の連絡も無しに突然後宮に入れって？…はっ、馬鹿げてるわ。きっとウチが地方貴族だからって見下しているのね。ホント、王国の城の花という花を全部ただの雑草に変えてやりたいわ」

王国の庭園は他国にも有名な程に美しい、と聞いた事がある。
そのことをふと思い出して言った言葉だったが…。

「……いいわね。これ使えるわ。売ったらいいお金になりそうだし。ふふ、ふふふふ…」

などと本気で考え始めるエミリアに、フローラはくすくすと笑いながら止めに入る。

「駄目よ、エミリア。そんな事止めて頂戴。見つかりでもしたら本当に死刑よ」
「でも、お姉さま。酷すぎると思わない？都合がよすぎだわ」
「仕方ないわ。国王命令だもの…」

フローラが寂しげに笑い、スっと席を立つ。

「さぁ、荷造りを始めなきゃね。3日後なんてすぐだもの」
「お姉さま！」

フローラは、エミリアが呼び止めるのも聞かずに部屋を出た。
部屋に一人残されたエミリアは、俯いて強く唇を噛んだ。

「なにが仕方ない、よ。お姉さまが一番辛いくせに。一番怒っていいはずなのに……っ」

無理をする姉を見て、悲しくなった。
涙がこぼれそうになって、慌てて上を向く。

「……ジダンが、好きなくせに！」

本人から直接聞いたわけではないが、多分間違いない。
フローラはいつもジダンを見ていた。
エミリアに恋うんぬんはわからないが、フローラがジダンに恋心を抱いているのは知っていた。
そして恐らく、ジダンもフローラのことが好きだ。
二人は両想いなのに。後もう少しで上手くいきそうだったのに。

「これで二人が結ばれなかったら、一生恨んでやるわよ。王国貴族共…」

そんな怨念のこもった捨て台詞を吐くと、エミリアは涙を拭いて立ち上がる。

「こうなったらお父様のところへ行って直談判ね」

そうと決まれば、エミリアの行動は早かった。

◇◆◇◆◇

「お父様、私納得いかないわ！」
「お前が納得いかなくても、王の命令だ。避けることなどできん」
「だって、いきなりよ？突然よ！？そんなのって、絶対おかしいわっ」

娘の迫力に驚きつつ、父は頭を振る。

「それが突然ではないらしい」
「どこがよ！？今まで一度だって連絡よこさなかったじゃないの」
「いや、どうやら三ヶ月前くらい前から手紙を届けていたらしいのだが、こちらから一向に連絡が来ないので痺れを切らして直接伝えに来た、らしい」
「手紙？そんなの……え、手紙？」
「ああ、手紙だ」

……手紙？

「ね、ねぇお父様。まさか赤い薔薇の印章が押された手紙じゃないわよね？」
「ん？いや、それだ。赤い薔薇は国王勅命を意味するからな。…だがなぜ、お前がそれを知っているんだ？」
「ね、ねぇお父様。それって多分これのこと……かも。えへ？」

エミリアは、ドレスの収納部分からくしゃくしゃになった紙を取り出し、机の上に広げて見せる。
広げるにつれて父の顔が青くなっていく。
ソレを見て、エミリアは確信した。

エミリアが正門前で拾っては『ゴミ』といって捨てていたものは、『国王の手紙』であったことを……。

あぁ、ごめんなさいお父様。
だって私、ただのゴミだと思ったんだもの。

その日の夜、エミリアは父からみっちりとお説教を受けたという。

第００３話　運命の歯車

国王からの通達があった翌日。

「お父様、私やっぱり納得できないわ」
「だからお前が納得いかなくても関係ないと言っているだろう」
「後宮入りするのはもういいの。それはもう諦めたわ」
「じゃあ何だというのだ」

何だというのだ、ですってぇ？？
そんなの決まってる。

「護衛役にジダンはいいとして、侍女が一人も付いていないってどういうことよ！？」

怒りに呼応するかのように、エミリアの紫色の瞳が煌めき、父の姿を捉える。
姉を溺愛するエミリアにとって、この怒りは当然のものといえた。

「仕方がないだろう。ウチで雇っている家人で女は２人しかいない。ウチは貴族だが貧乏だ。それに侍女がいないことならフローラはもう了承済みだ」
「ええ、お姉さまならそうするでしょうね。お父様を困らせたくないから」

「私だって可愛い娘に一人の侍女すら与えてやれないのは心苦しいが、本当に仕方がないんだ。それに侍女ならあちらで貸し出してくれるはずだ」
「それじゃ駄目なのよお父様」

エミリアは怒りを押さえ込むように、静かに言った。

「それじゃ駄目なの。後宮で過ごすのに、信用の置ける侍女がいないなんて、そんなの地獄と同じようなものだわ」

エミリアのいつになく真剣な様子に、父は少し戸惑った。
今にも泣き出しそうなエミリアに、父は慰めの言葉をかける。
しかし、エミリアはそれを拒絶し、涙を浮かべた瞳で父を見据えた。

「お父様、お姉さまの侍女について…私から名案があるの」

いつもなら、父はここで嫌な予感を察して逃げるのだが、今日はエミリアの様子が違いすぎて、そのチャンスを逃してしまった。

「私の提案、聞いてくれるわね？」

ああ、と頷いた父に、エミリアは心の中で笑みを浮かべた。
父の頷き。

それはつまり、エミリアの勝利を意味していた。

（さぁ、エミリアの独壇場のはじまりよ！）

◇◆◇◆◇◆◇

そして、約束の日がやってきた。

「お父様、では行ってきます」
「ああ、気をつけてな。フローラ、ジダン」
「お母様、どうかお元気で」
「本当に行ってしまうのね。…寂しいわ」

フローラとジダンは、玄関の扉の前で別れの挨拶を交わしていた。
父は顔には出さないが、きっとすごく悲しんでいる。
それが分かるから、フローラは余計に辛かった。

「ところでお母様、エミリアを見てない？」

フローラが聞くと、聞かれてもいない父がびくりと震えた。
どうしたのかと思ったが、あまり気にしないことに決めた。

（きっと最近はお年を召してきたから、お体が辛いんだわ。お元気で、はお父様に言ったほうが良かったかしら…）

フローラの見当違いの心配は、もちろん父には届かず、フローラの胸の中にしまわれた。

「エミリア？さぁ、朝食の時にはいたのに、どこへ行ったのかしら。もしかしたら、悲しすぎてあなたの顔を見れないのかもしれないわね。あなたが行ってしまうのを一番嫌がっていたのはあの子だもの」
「そう…、残念ね。最後に挨拶したかったのだけれど。もう時間がないし…」
「手紙を書かせるわ。今はきっと拗ねているだけだから」
「わかったわ。じゃあ、行ってきます」
「「行ってらっしゃい」」

両親に見送られ、フローラとジダンは家を出た。
もうすぐ迎えが来る。
エミリアに会えなかったのは残念だけど、一生会えないわけではないから、仕方ないと諦めた。

「いいのですか？エミリアと会わなくて」
「…いいわ。あっちが会いたくないのなら、無理に会う必要もない」
「なんなら、迎えを少し待たせて…」
「本当にいいのよ。ありがとう、ジダン」

ジダンは釈然としない、という顔をしていたがフローラはあえてそれを無視した。

庭園を抜けると、その先に正門が見える。
するとそこには、すでに人が立っていた。
もう迎えが来ていたのかとも思ったが、よく見ると……見覚えのある少女の姿。
フローラとジダンはまさかと思い、慌てて駆け寄る。
二人に気づいたらしい少女は、くるっとこちらを振り返りきれいにお辞儀して見せた。

「本日からフローラ様の侍女を仰せつかりました、エリーと申します。これからよろしくお願い致しますわ」

エリーと名乗るその少女は、銀色の髪をしていた。そして瞳の色はアメジストのように美しい紫。
その少女の発言に、二人は絶句した。

「……エ、エミリア！？一体ここでなにしているの！？」
「何とは愚問でございますわ、フローラ様。それと私は侍女のエリー。侍女はご主人様のお傍にいるのが鉄則」
「なんの冗談ですか？笑えませんよ、エミリア」
「まぁ、騎士様までそんな事おっしゃって。私はただの侍女でございますのに」

「「エミリア！！」」

二人から同時に名前を強く呼ばれ、少女はひょいと肩をすくめた。

「もう、二人ともノリが悪すぎだわ。せっかく成りきってたのにちょっとは乗ってきて頂戴よ」

悪びれる様子もなく、エリー……――エミリアは、そんな軽口を叩いて見せた。

「まったく、こんなことして許されると思っているの？お父様に伝わる前に早く戻りなさい」

「残念。お父様にはもう許可を取ってあるわ」

「ど、どうやって？」

あの頑固な父が、こんな馬鹿げたことをそうそう許すはずがない。そう思って聞いたフローラだったが、エミリアから話を聞いて、聞かなきゃよかったとこめかみを押さえた。

「どうって…、後宮の恐ろしさ（割り増し）と、後宮の女達に対するジダンの役立たずさ（真実）をお話して差し上げただけよ？そして、その環境においての私の頼もしさをお父様に植えつけてやったの」

そうだ。
この子は幼い頃から、とても弁の立つ子だった。
そしてそれは年月を経るごとに鋭さを増し、今では家中の誰もエミリアに口で勝てるものはいない。

「何よ？嘘は言ってないわよ？話をちょっと色付けしただけだもの」

エミリアのそんなどでもいい弁解に、とうとう二人は吹き出した。
この状況が馬鹿らしく思えてきたのだ。

「諦めましょう、フローラ様。どうせ何言ったってエミリアは付いてくるでしょうし」
「ふふ、そうね。エミリアがいれば頼もしいのは事実だもの」

正直いって不安でしかなかった後宮生活だったが、今はわくわくの方が勝っていた。
それはきっとエミリアのおかげだし、そして何より、エミリアがいるんだから毎日がつまらないわけがない。
フローラは王国からの迎えの馬車が来るまで、腹を抱えて笑っていたという。

そうして運命の歯車は少しずつ転がり始めた……――。

第００４話　新後宮制度

南の大国エキセンバーグといえば、誰もが『花と貿易の国』と口をそろえて語ることだろう。
その傾向は、王都に近づけば近づく程に色濃さを増す。
王都には幾千にも満たぬほどの美しい花々が咲き誇り、城下の港町では他国との交流も盛んで、常に賑わいを見せている。

ここ数年は大きな戦争も起こらず、エキセンバーグはこれ以上にないくらいの平穏な日々を送っていた。
そんな平和な王国エキセンバーグで今最も問題視されているのは、時期国王継承者と、王子たちの婚約者探し。
前者は、王子たちが婚約者を見つけてからでも遅くはない。
ということで、今一番の問題は『婚約者探し』。

「そこで取り入れられたのが、新後宮制度。この国の王子たちには、上から下まで誰一人として婚約者がいないそうよ。だから手っ取り早く嫁を引っ掛けようってのが、この後宮制度の肝ね」

仕入れてきた情報をてきぱきと披露してみせるエミリアに、フローラはポカンとした表情でエミリアを凝視する。

「…あなた、いつの間にそんな話を仕入れていたの？エミリア」
「あら、そんなの初日の昨日に決まってるじゃない。情報は迅速かつ確実に、ってね」

「どこの間者の台詞よ」
「後宮において情報は何より重要なのよ？集めといて損はないわ。それで、もらえる物だけ頂いて家に帰れたらそれがベストね」
「意地汚いわね」
「用意周到と言って頂戴」

そう言ってエミリアはにやりと悪い笑みを浮かべた。
部屋の中にはフローラとエミリアしかいないので、完全に姉妹の会話である。
もちろん、主導権を握るのはエミリアだ。

「新後宮制度は、王子の囲いなく1つのものとして考えていいわ。つまり、王子全員の側室ってことね。気に入られたら即お持ち帰り……ってわけで王子らしき人物見かけたらすぐに逃げること」
「お、お持ち帰り…？」

「エミリア。まったく…そういう言葉をどこで覚えてくるんですか？」

ぽん、と肩を叩かれ振り返ると、そこには騎士団の制服をまとったジダンが立っていた。
白を貴重とし、赤のラインがとても目を引く制服だ。
その制服は、彼のために作られたかのようによく似合っていた。

「まあ、ジダン！すごい、よく似合ってるわ。白騎士団の一員になれるだなんて、ホント素晴らしいわ」

「褒めたって何も出やしませんよ、エミリア」
「別に期待なんかしてないわよ。その制服姿を見られただけで十分満足してるもの」

王都には、国王直属の白騎士団、独立近衛部隊の赤騎士団の２つの騎士団が存在する。
その２つの内どちらかの騎士団に入ることは、騎士にとっての名誉となり、貴族らは喉から手が出るほどこの地位を欲しがる。
しかし、これは実力が主で、家柄などは二の次。
なので、団員のほとんどが下級貴族で成り立っているのだ。

「確かに、入団できたのは名誉なことですが、まだまだ下っ端ですから」
「これから頑張っていけばいいじゃない。目指せ上将軍よ！」
「…いや、それはちょっと厳しいかな」
「何言ってるのよ。私たちの騎士様なんだからソレくらいになって貰わなきゃ」

エミリアの言葉に、ジダンはクスリと笑って「努力します」と答えた。
暗に、白騎士団に入れただけで喜ぶな、と言っているわけだ。
本題はそこじゃない。
地位も名誉も財産も、貰える物は全部貰って家に帰る。
それが最終的なゴール地点なのだ。

「いい？この後宮制度には面白い規則があるわ。三年間王子と夜を共にしなかった娘は家に帰される！」
「「三年間？」」
「そう、三年よ。ちょっと長いけれどソレを乗り越えれば、めでたく目的達成よ」
「三年間もフローラ様に気づかない男はいないと思うのですが…」
「当たり前よ！お姉さまの魅力に気がつかない男がいたらそんなの男じゃないわ。ただのクズよ、クズ！そんな男、引っ叩いて生けすに放り込んでやる」
「エミリア、それじゃあ矛盾してますよ。三年後に帰るなんて無理じゃ…」
「馬鹿ね。何のために私がいると思っていらして？お姉さまを害虫から守るためよ」

仮にも一国の王子を『害虫』呼ばわりするのなんて、きっと後にも先にもエミリアくらいなものだろう。
本当なら、チャンスを無駄にするものか、と王子をモノにしようと考えるのが普通である。
しかしエミリアの場合、王子たちに相手にされないようにと努力しようとしている。
極めて珍しい考え方と言えるだろう。

「三年間も後宮にいて、王子に相手にされないなんて屈辱的な仕打ちよね？でも私たちの目的はソレなのよ。…だからといってお姉さまにはそんな惨めな思いしてほしくないわ」
「あら、あなたはそんな事考えなくてもいいのよ？別に惨めになんてならないもの」

「そうですよ。フローラ様を馬鹿にするようなヤツがいたら俺が斬り殺しておきます。だからエミリアは安心して…」
「ちょっと待って！今斬り殺すって言った？駄目よ？そんなことしたら騎士団の権威を剥奪されちゃうじゃない！そんなもったいない事しないで頂戴」
「大丈夫です。うまい事隠ぺいしますから」
「あらそう？ならいいわ」
「……二人とも。会話の流れがおかしいわ。あなたたちは犯罪者にでもなるつもり？」
「「いいえ？」」

二人にケロっとそう言われ、フローラは額を軽く押さえた。
エミリアも変人の部類に入るが、ジダンも相当な変人である。
特に、エミリアとフローラの事となると危ないことでも平気でやろうとする。
――自分がどうなっても、二人のことは絶対に守る。
そんな感じの決意が、彼の中には刻まれてしまっているらしかった。

「あのねぇ、二人とも。私の事でそんなに色々考えてくれるのは嬉しいけど、限度ってモノがあるでしょ？犯罪者になるような事は絶対にしない事。約束してくれるわね？」
「……善処します」
「……覚えておくわ」
「約束、してくれるわね？」
フローラの物言わせぬ迫力に、二人はそろって「はい！」と返事を

返した。

「良かったわ。二人ともわかってくれたみたいで」

そう言ってにっこりと極上の笑みを浮かべるフローラに、エミリアはただただ震え、ジダンはすっかり顔色を失くしていた。
ウォーカー家の中で一番の強者は、もしかしたらフローラなのかもしれない。
そんな事をふと思った瞬間だった。

第００５話　泥棒猫

後宮に入って三日目の朝、事件は起きた。

「……猫、でしょうか？フローラ様」
「どうみても…猫、よね？エミリア」
「フローラ様、エリーでございます。お間違いにならないで」
「あら、ごめんなさい。でも今は誰もいないわよ？」
「油断は禁物ですわ。気を抜かないで。ここは中庭なのですから」
「そうね」
「そうです」
「そうよね。そんなことより……、アレは猫で間違いないかしら」
「ええ、猫で間違いないと思いますわ」

フローラに与えられた部屋は、テラスから中庭へと出られるようになっていて、今はフローラと二人でその中庭をお散歩中だ。
まだ朝が早いせいか、そこには誰の姿もなく実質フローラとエミリアの二人だけである。
どうやら王都のお姫様方が起き出すのは１２時を回る頃で、朝の７時に目を覚ますエミリアたちは、かなりの異例だといえた。
田舎育ちのエミリアたちにはそれが普通なのだが、王都育ちのお嬢様たちにはこの常識が通じないらしい。
でも、そのおかげで周りを気にすることなく庭園を見て回れるのだから、早起きもなかなか悪くない、とエミリアは思った。
城の庭園は、『花と貿易の国』といわれるだけあって、かなり見物だ。

しっかりと管理された庭園は、色から花の配置、バランスなどがよく考えられていて、見るものを魅了する程の美しさを誇っていた。

そんな庭園を歩いていた時だ。
突然二人の目の前を、白い物体が通り過ぎた。
そしてそれが、とてもきれいな毛並みを持つ猫だった…ということまでは特に問題はない。
しかし、その猫がくわえている物に問題があったのだ。

「ねぇ、エリー？あの白猫がくわえている物に見覚えない？」
「ある気がしますわ」
「よね？」
「ええ、だってアレ……私がさっきまで首から下げていたヤツですもの！」

言うが早いか、エミリアは猫がこちらを向いて止まっている隙に駆け出した。
猫が口にくわえている物は、エミリアお気に入りのネックレス。
二年ほど前、フローラからプレゼントされたものだ。
どうやらさっき目の前を通り過ぎたあの瞬間に盗まれたらしい。
現に、今エミリアの首には何も下げられていないのだから、まず間違いないだろう。
死んでも取り返す！
エミリアの瞳に、炎がともった瞬間だった。

「ちょっとエミリア、取り返すつもりなの！？」
「当たり前でしょ！昼食までには戻るから、お姉さまは先に部屋に戻ってて！」

自らがエリーという侍女であることも忘れ、エミリアはフローラの側を離れた。
猫は、エミリアが駆け出すのと同時に向きを変え、走り出す。

「こら待て！泥棒猫ー！！」

思いのほか猫の足は速く、そしてすばしっこかった。
エミリアが走りつかれて立ち止まってしまうと、猫もソレに合わせて立ち止まり、ちらっとこちらの様子を伺ってくる。
そしてエミリアが走り出すと、猫もまた走って逃げるのだ。
まるでエミリアをからかって遊んでいるような、そんな錯覚を覚える。

そして、そんな追いかけっこを続けること15分。
猫は、ある木の傍まで行くと足を止めた。
やっと観念する気になったかと思ったら、その木には何者かが腰を下ろしていた。

（誰かいるの…？）

エミリアがそっと覗くようにして見ると、そこには黒髪の青年が分厚い本を片手に猫の頭をなでていた。
とりあえず、……驚いた。

自分を棚に上げて言うのも何だが、この国で黒い髪を持つ人間はとても珍しい。
エミリアの銀とは違って、青年の黒は『闇』を表し、この国の人間はその髪色を持つ者を忌み嫌った。
そして、黒い髪を持って生まれる子供は『悪魔の子』と蔑まれるのだ。

「クー、お前また何か盗んできたのか？いい加減やめろと言っているのに……」

黒髪の青年の言葉に、猫は「ナー」と甘えた声を出す。
わかっているのかいないのか、いまいち理解しにくい返答だった。

「いいから持ち主にちゃんと返して来い。いいな？」
「ナーナー」

どうやら猫はエミリアのネックレスを青年にあげたいらしかった。
でも、そんな事してもらっちゃ困る。
それは私の、命よりも大事なものよ！！

「少しよろしいでしょうか？」

エミリアは、木陰から一歩出ると、そう声をかけた。
すると青年は驚いたようにこちらを振り返り、エミリアを凝視する。

「……銀色の髪……？」

青年の瞳は、吸い込まれそうなほど透き通った青空の色をしていた。

第００６話　黒き青年

「その首飾り、私の命よりも大切なものなので一刻も早く返していただきたいのですが」

エミリアは青年を真っ向から見つめて、そう告げた。
青年もエミリアを見つめて、口を開く。

「わ、わかった。ちゃんと返すからそれ以上近づいてくれるなよ」
「？近づかなければ、猫から取り返せませんわ。無理です」

そう言ってエミリアが一歩青年に近づくと、青年は慌てたように一歩後ろに下がる。

「即答するな！そしてそれ以上俺に近づくな！」
「だから無理です。近づいて欲しくないのなら、そこの猫こっちに差し出して頂けませんか」
「お前…それ脅迫のようにしか聞こえないぞ」
「違いますけど似たようなものですかね。私はソレが帰ってくれば大人しく退散しますから、説得でも何でもしていただけませんか」
「猫に説得！？無茶言うなよ。そんなの出来るわけ…」
「では、仕方ありませんね」

「ぬわあぁぁぁぁ！わかった。わかったから、こっちに来るな！」
近づいてきたエミリアに慌てた青年は猫に早く返しに行くように言うが、猫は青年にじゃれるばかり。
一向にコッチに来る気配がない。
エミリアは、はぁ…とひとつ大きなため息をつくと、青年を見据える。

「駄目ですね。やっぱりその猫とっ捕まえるしか…」
「ちょ、待てって！他に方法が」
「ありませんね」
「だから即答するな！」
「あーもうっ、うるさい人ですね！じゃあ一体どうしろって言うんですか！」
「知るか！何かこう…催眠術でも使っておびき寄せるとか」
「出来るか！！」

エミリアは、お互い一歩も引かない（青年はエミリアが近づくとその分後ろに下がるが）白熱した雰囲気の中、とある作戦に出ることにした。

「…わかりました。では、そこから一歩も動かぬようお願い申し上げますわ」
「？？…お前、一体何をするつもり――――ぬおぉっ！？」

エミリアは近くに落ちていた石を適当に拾い上げ、白猫めがけて鋭く投げつけた。
猫は驚いたように向かってきた石を避け、木の上まで駆け上る。
一方、猫の近くにいた青年も当然、石の被害を被り慌ててそれを避けた。

「ちっ…、本当にすばしっこい猫ね」
「俺を殺す気か！？」
「まぁ…、避けなくても当たりませんのに。私、コントロールには自信がありますの」
「だとしても！先に一言言うとかくらいできただろうが！」
「言ったじゃありませんか。『危ないから、一歩も動かぬよう…』」
「わかるかっ！というか、『危ないから』なんて単語さっきは言ってなかったぞ」
「あら、そうでしたか？……そんな事より猫はどこに逃げまして？」
「そんな事！？」

命の危機を『そんな事』扱いされた青年は、疲れたようにため息をつき、猫の逃げ込んだ木を指差した。

「そこの木に登った。でも、そんな格好じゃ木登りなんてできないだろ。…いや、元より女が木登りなんてするわけ」
「そこ、どいて頂けますか。邪魔です」

そう言ってエミリアがどんどん近づいてくるので、青年はエミリアが近づいてきた分だけその場を離れた。

エミリアは、猫のいる木の下まで来ると、スカートをばっとめくり上げ太ももにくくりつけた護身用の短剣を取り出す。
その大胆な光景をばっちり目の当たりにした青年は、顔を若干赤らめながら怒鳴りつけた。

「何してんだお前！淑女がこんな昼間っから生足さらして…アホか！」
「それは夜ならいいということですか？」
「そういう意味じゃない！だから時と場所を考えろって意味で…」
「まったく面倒くさい方ですね。要はあなたが見なきゃいい話でしょう。目でも閉じていてくださいな」

本当に面倒くさそうにエミリアはそう言うと、片手に持った短剣で、足首まで来る長いスカートを膝丈まで切り裂いた。
そのぶっ飛んだ光景に、青年はこれでもかってくらいに目をむく。

「なっ……！？」

切り裂かれたスカートは下に放置。
動きやすくなったので、エミリアはそのままの格好で目の前の木を驚くべきスピードで登っていく。
小さい頃から木登りはお手の物だ。
よく高い木に登ってはジダンに見つかり、お説教されていた。

「追い詰めたわよ！泥棒猫チャンめ、覚悟なさいっ」

「ナーナー…」
「そんな甘えた声出しても駄目よ。さぁ、お返しなさい！」
「ナー！！」
「え？…わ、ちょっ」

追い詰められた猫は逃げられないと踏んだのか、エミリアのほうへ飛び込んできた。
予想外の猫の行動に、心の準備をしていなかったエミリアは木の上でバランスを崩した。
あ、コレ落ちるわ。
どうしよう……この高さは、ちょっとまずいなぁ。
自分の事のはずなのに、まるで現実味がわかない。
ああ、落ちるんだな。
ただ、そう思った。

「———馬鹿野郎っ！」

……え？
いつの間に木の上に登ってきたのか、エミリアは腰を青年の逞しい腕に支えられ、なんとか落ちずに済んだ。
後ろから抱きしめられるような形で、エミリアは青年の腕に支えられる。

「……あの、私、野郎じゃないんですけど……」

思ったより、間の抜けた事を言ってしまった。
それほどにエミリアが動揺していたということだ。
すると、青年はハア…と深いため息をつく。
エミリアの首筋が、温かく湿った。

「…お前、そういうこと言う前にお礼を言うもんじゃないのか？普通」
「そう、ですね。ありがとうございます」
「……ああ」
「ところで…、近づくなとおっしゃっていたのに、この距離はよろしいのですか？」

「あ。」

青年ははっとして、エミリアを突き放した。

「あ…」

当然支えを失ったエミリアは再びバランスを崩し、体勢が傾く。
結局落ちるのかしら、私。
そんな事を思っていると、また青年の腕が伸びてきて今度は前から抱きしめられる形で、支えられる。

「…何がしたいんですの」
「……うるさい。俺にもわからん」

「変な、人ですのね」
「お前に言われたくないんだが」

きっと今この2人の光景を目にした人は、抱き合ってイチャイチャしているようにしか見えないだろう。
だが、当人たちはそれどころではなかった。
そろそろ降りよう、とエミリアが身じろぎしたまさにその時。

「「あれぇ？兄さんが女の人と抱き合ってるー。珍しい～」」

突然、地上から第三者の声が割り込んできた。
まだ幼さの残る、少年の声が二つ、重なって聞こえた。

第００７話　麗しき双子

突然割り込んできた第三者の声に、エミリアと青年は驚いて下を見る。
すると、そこには金髪が眩しい２人の少年がこちらを見上げていた。
よく見ると、２人の顔は瓜二つ。
身長から体型、ちょっとした仕草までそっくりだ。

「兄さん、そんなとこで何やってんのさ」
「馬鹿、ニア。見てわからないの？あれはどう見たって逢い引きじゃないか」
「そっか！じゃあ僕たちはお邪魔だね、ベル。さっさと退散しよう」

「ああ、そうしよう！」

「待て待て！ふざけた勘違いしてんなよそこのアホ双子」

あ、やっぱり双子なんだ。
にしても、よくここまでの美形を２つも生み出したものだ。
…神様の気まぐれだろうか？

「だって、あの女嫌いの兄さんが？」
「特に美人が嫌いなあの兄さんが？」

「「美人と抱き合ってるなんてさ～♪」」
「だぁから勘違…」
「とりあえず。ここから降りませんか」

何か勝手に盛り上がり始めている三人にピシャリと言い放ち、エミリアは青年から体を離す。

「おまっ、落ちるぞ？」
「ええ、落ちるのですよ？そこの双子も危ないので少しどいていただけますか？」
「「イエッサー！」」

双子はエミリアに言われた通り、その場から少し離れエミリアの様子を見守る。
そして、胸に抱いていた白猫を遠慮なく放り投げ、自らも木から降りる準備を始めた。

「何するつもりだ…？」
「ですから下に降りるんですよ。あ、あなたは目を瞑っていた方がよろしいんじゃないかしら」
「は…？」

地面からエミリアたちのいる木の枝までの高さは、だいたい大人二人分くらい。

それ程高さはないにしても、落ち方を間違えれば大変なことになる。
しかし、1ミリの躊躇もなくエミリアは木の枝から飛び降りた。
その際、短くなったエミリアのスカートがふわりと広がる。

「「おお～、お嬢さん大胆～♪」」
「んなっ……！？」

それぞれから歓声やら喚声やらが聞こえてきたが、エミリアの知ったことじゃない。
エミリアは、タイミングを見計らってくるっと一回転すると、受身を取って着地する。
服は少し汚れてしまったが、エミリアはかすり傷1つなく地上に降り立った。

「お、おま…っ死ぬ気か！？」
「生きていますが？」
「そういう事を言ってるんじゃない！ひとつ間違っていれば死んでいたんだぞ？」

そんな事を真剣な顔で言いながら、青年も木から飛び降り、エミリアよりも華麗に地面に降り立つ。
エミリアのように受身を取るでもなく、片膝をつくのみで彼はあの高さを飛び降りてみせた。

「……あなたに言われたくないのですけれど」

ちょっと妬けた。

「「では改めまして、」」
「僕、ここの第４王子のベルって言います。よろしくー」
「右に同じく第５王子のニアです。あ、僕たち見ての通り双子なんだけど、見分け方はね…」
「「ずばり瞳の色！」」
「……緑の瞳がベル様、青の瞳がニア様ですね」
「「あったり～！すごいね、一発で覚えられるなんて」」
「まぁ、それくらいは・・・」
「「ちなみに、僕たちの年は１５。どうぞよろしく～」」

なんというか、随分とフレンドリーな感じの双子王子だった。
人当たりのよさそうな柔和な顔立ちに、イタズラ好きのする目を持った何とも不思議な少年たち。

「「で、キミは？」」
「え？ああ…、三日前からこちらでお世話になっておりますエミ…じゃなかった、エリーと申します。年は…今年で１６になります」
「「新しく後宮に入った娘！？」」
「いえ、侍女として参りました」
「なぁんだ。残念」
「お姫様なら僕たちのお嫁さんにしようと思ったのに」

「さすがにお二人の奥さんにはなれませんわ。私の身が持ちません」
「「え〜」」

会話が一通り落ち着くと、人々の視線は自然と黒髪の青年へと向けられる。
青年はその視線に気がつくと、ぼそっと聞こえるか聞こえないかくらいの声で自己紹介をした。

「第2王子のクラウドだ。…19」

漆黒の髪に、スカイブルーの瞳を持つ長身の青年。
この青年もよく見ると、とても整った顔立ちをしている。
双子のような明るい感じではないが、近寄りがたい雰囲気を持ったクールな青年…といった印象だ。
それにしても、この国の王子は皆こんなに美形なのだろうか？
とりあえず3人の王子と出逢ったわけだが、皆整った容姿をしていた。
ということは、他の王子たちもやっぱりそうなんだろう。と、当然期待は高まる。
おっそろしい所ね、王宮って…。
エミリアは、心の中でそっと呟いた。

「……自己紹介はいいとして、この距離は一体…？」

エミリアと双子から2メートル程離れた所に、青年――クラウドは

腰を下ろしていた。
とても近いとは言えない距離感に、エミリアは思わず尋ねる。

「兄さんは極度の女性嫌いでね。特に美人には警戒心がとっても強いんだ」

そう答えてくれたのは、第４王子のベル。
クラウドは例の白猫とたわむれているため、こちらの事は無視しているらしい。
あ。
そういえば、あの泥棒猫からまだネックレス返してもらってないわ…。

「でもさ、さっきまで抱き合ってたくせに今更こんな離れて座るなんて、兄さんも面白いことするよね」
「ねー。もう触っちゃってるんだし、そんな警戒することないじゃない」
「そーだよ兄さん。珍しく兄さんのほうからエリーに近寄ってたみたいだし」
「せっかくだから、ついでにエリーで脱女性嫌いしちゃったら？」

「断る」「お断りします」

クラウドとエミリアは、ほぼ同時にそう言った。

第００８話　悪童

まさかこうも見事にハモってしまうとは思っていなかったクラウドとエミリアは、驚いたようにお互いの顔を見つめ、そしてそれぞれ嫌そうに顔をしかめる。
皮肉にもこの動作もまた、驚きのシンクロ率だ。
そのことに気がついて、またもや二人して嫌そうに眉をひそめるのだった。

「…なんですの？そんなにハッキリおっしゃられなくてもよろしいじゃありませんか。私、少々傷つきましたわ。心が」
「その言葉、そっくりそのまま返させていただこう。…俺は別に傷ついてなどいないが。だいたい、お前の方が先に言ってきたんじゃないか」
「いいえ？お言葉ですが、そちらの方がコンマ一秒ほど早く口にされていましたわ。間違いありません」
「細かいな！ならこちらからも１つ言わせてもらおう。お前侍女だろう、何なんだその態度は。俺は今まで侍女にそんな口を利かれた事など一度もないぞ！」
「それは失礼致しました。田舎の出なもので、こちらの侍女というものがよくわからなくて。以後気をつけますわ」
「それだ、その態度が気に入らない」
「あら、気に入っていただかなくても結構ですわ。気に入られなかったとしても、私には何一つ不自由などありませんもの」
よくもまぁつらつらと言葉が出るものだ、と半ば放置プレイをくら

っている双子はひそかに思った。
そして驚きもした。

まず、クラウドがこんなにも長く女の人と会話しているのをベルとニアは見たことがない。
それはクラウドの髪の色が関係しているわけだが、彼の黒い髪を嫌ってか実の母親のローレンですらクラウドとまともに会話などしてくれないのだ。
それなのに、他のご令嬢が一体何を話してくれるというのだろうか。彼の髪色を見ただけで逃げていくような女と一体何を話せというのか。
そんな状況が小さい頃からずっと続いてきたのだ。そうなると、人を信用できず避けて過ごすようになるのは、ごく自然なことのように思えた。
そして、それが普通であると考えると…

「やっぱりエリーって変わってるよね。クラウド兄さんとあんなにぽんぽん言い合っちゃうなんてさ」
「だよね。どちらかというと兄さんの方が押し負けているけれど…」
「そこは見てみぬフリしてあげるんだよ、ベル。例え兄さんがエリーに言い負かされていたとしても」
「ニアだって言ってるじゃないか。兄さんが負けてるって」
「負けてるモンは負けてるんだから仕方ないだろ？」
「ニア、さっきと言ってること違う」

などと、どうでもいい会話を交えながらベルとニアは、二人の会話を観戦する。
あくまで観戦。二人の会話の間に入ろうなどとは、ミジンコほども

思わない双子であった。

「何なんだお前は！ああ言えばこう言う、俺を馬鹿にしているのか！？」

「まさか、馬鹿になどしていませんわ。気のせいでは？」

「その目だ。その目が俺を馬鹿にしている、間違いなく」

「気のせいでは？」

「話し口調からしても」

「気のせいでは？」

「人の話は最後ま」

「気のせいでは？」

「……お前、俺の話聞く気もないだろ？」

「ええ。」

「即答か！だからその態度が俺を馬鹿にしているというんだ！！」

ふむふむ、やはりエリーの方が数枚上手か。

双子は、二人の口論を眺めながら何やら賭け事をし始める。

このまま二人の言い争いを見ているのも悪くはないのだが、ただ見ているだけではやはりつまらない。

せっかく面白そうな事が目の前に転がっているのに、これを利用しない手はない。

「エリーが兄さんを言い負かして勝つに１００コル」

「エリーが兄さんを言い負かして勝って、兄さんが拗ねて逃げ帰るに１２０コル」

「えー、それじゃあ賭けにならないじゃないかニア。それ、どっちみち兄さん負けてるし」

「え？だってコレ、兄さんが負ける前提での賭けでしょ？」
「そうなの？じゃあ僕はー…」

双子の予想はあくまでもクラウドが負ける前提で進んでいる。
それはそうだろう。
誰がどう見ても押されているのはクラウドの方だ。
いやいや、試合終了ギリギリで一発逆転なんて事があるかも……などとは一切考えない非情な双子は、ひたすらに『クラウドがエリーに負けてどんな行動に出るか』について話に花を咲かせる。

「うーん、どれもありえるから1つに絞るのは難しいな…」
「ねぇ…。まあ、何でもいいか。にしてもだよ、ニア」
「ああ、言いたいことはわかってるよベル。新記録だよね、コレ」
「だよね。兄さんがこんなにも長く女性と会話して正常でいられるなんて奇跡的じゃないか？」
「うん、奇跡だよ…」

クラウドは極端な『女性嫌い』である。
それはまあ、これまでを見ていればなんとなくお解かりいただけるだろう。
そしてその『女性嫌い』というのも、やはり過去の女に対する苦い経験からきているのだが、特にクラウドの『女性嫌い』はかなり深刻なものだった。
というのも、女性の近くにいるだけで吐き気を催し、直に触れればさらに腹痛まで起こす。
もはや『女性嫌い』という名の病気だ。

そんなクラウドがよもや会話を成り立たせるだけに留まらず、直に女性に触れ、体調を崩さないだなんて…！
これを奇跡と呼ばずに何とする。
会話に関しては現在進行形なので、双子にとってはさらに驚きである。

「やっぱりエリーって面白いなぁ…」
「ベル気に入ったの？実は僕もなんだ。最近気に入ってる『玩具』もないし、エリーを次の『玩具』にしようか」
「ああ、それはいい考えだね！じゃあ、さっそく作戦会議といこうか」
「了解！ああ、今日からまた毎日が楽しくなるね」

二人はにやっととイタズラ好きのする笑みを浮かべ、そそくさとその場から立ち去った。
エキセンバーグの双子王子といえば、大のイタズラ好きで名が通っているほどの悪童だ。
小さい頃から二人でこっそりと悪巧みをしては、大人たちにイタズラをしかけ困らせてきた。おまけにベルとニアのお世話係は、全ての王子たちの中でもずば抜けて入れ替わりが激しかった。
辞めた原因の８割が双子のイタズラだというのだから、どれだけタチの悪いイタズラをしてきたのかと考えるだけでも恐ろしい。

そして、気に入った相手はとことん可愛がる（玩具にして遊ぶ）という歪んだ感性を持つ双子に、とんでもない気に入られ方をしたとは全く知る由もないエミリアは、未だにクラウドとの口論を続けていた。
双子がその場から消えているなんて、きっと気づいてすらいないの

だろう。

「だぁぁぁぁ！！本当に何なんだお前は！ああ言えばこう言う、俺を馬鹿に…ってこれじゃさっきの会話と同じだな！！！」
「ええ、リピートしていますね。いつの間にやら」
「ハア…もういい。何だかあほらしくなってきた。やめだ、やめ。面倒くさい」
「ええ、それがよろしいかと。私も正直とても面倒くさい人だな、と思っていたところですし」

思ったままを正直に口にしただけなのだが、どうやらこの王子にはお気に召さなかったらしい。
クラウドの額に青筋がピキッと浮かんだ。

「お、前なァ……」
「冗談ですわ」

肩をすくめてエミリアが言うと、クラウドは額を押さえながら大きなため息をついた。
双子の賭けの内容的に言うと
『エリーにクラウドが言い負かされ、エリーのあまりの非常識さにクラウドが呆れた』
となるのだろうか。
何はともあれ、エミリアがクラウドとベル・ニアに痛烈な第一印象を与えたというのは間違いないだろう。

第００９話　（作成中）（前書き）

作成段階中です。
完成した状態で読みたいという方は、バックでお願いいたします；；
作者は一括で更新するのがとても下手です。
途中でも全然問題ないよ、という方のみお進み下さい。

第００９話　（作成中）

「はぁ…人と会話をしていてこんなにも疲れたのは初めてだ。どうしてくれる」
「どうもしませんわ。あなたが勝手に喋って勝手に疲れただけですもの。私に押し付けないでくださいませ」
「お前はまず、その物言い何とかならないのか。アレか、誰に対してもその態度なのか？」
「さぁ…？どうなんでしょうねぇ？」
「その面倒くさそうな態度はやめろ。イラッとするから」
「そんなの知りませんわ。ご自分でイラッとしないように努力してください。私はこれでも努力しているのですよ？主に言葉遣いとか」
「……もういい」

ソレでか？
と思わないでもないが、いい加減クラウドもこの女の物言いにも態度にも慣れてきたので、これ以上は言うまい。というか、これ以上言ってもこの女が素直に直すとは思えないのでもう諦めよう。

「あの、すっかり忘れ去られているようですが…」
「なんだ」
「あのクソ忌々しい泥棒猫はどこに行ったんですか？さっさととっ捕まえて私の首飾りを返していただきたいんですけれど」
「あぁ、そういえばお前そんな事言ってたな」
「そんな事……？私今あなたに対してイラッとしましたわ」
「わざわざ言わんでいい」

どうやら彼女にとってあの首飾りはとても大切なモノらしい。
その証拠に、思わず『そんな事』と口走ってしまったクラウドに対し、エリーの苛烈なまでの鋭い視線が突き刺さる。

それにしても、淑女が『クソ忌々しい』とは何だ。口が悪いにも程があるだろう。
今まで見てきた女達は性格こそ悪かったものの、さすがに貴婦人の端くれ。言葉遣いに余念はなかった。
それがこの女ときたら、貴族の侍女とは思えない破天荒な行動に、非常識な言葉遣い。
確かこの女「田舎の出」だとか何とか言っていたが、それにしても非常識すぎる。どんな田舎者だってさすがに「王国貴族」に対する敬意くらい持ち合わせているはずだ。それがこの女には全くの皆無だ。

もしかしたらこの『黒い髪』だからそんな馬鹿にした態度なのかとも思ったが、どうやらそういうわけでもないらしい。弟のベル・ニアに対しても全く同じような態度だった。
ということは、やはりこれがこの女の「通常」というわけか。

「首飾りといったか？」
「ええ。さっさとお返しいただきたいのですが」
「……」

この女はどうしてこうも上手く俺のイラッとポイントをピンポイントで押してくるのだろうか。
逆に感心する。

ハァ…、と今日何度目とも知れないため息をついて、クラウドはズボンのポケットから『ある物』を取り出した。

「お前の捜している『首飾り』はコレのことだろう？さっきユマが置いて行……――」

「それーっ！！！」

「どわあぁぁぁぁあああぁっ？！」

例の首飾りとやらをエリーに見せてやると、エリーは目にも留まらぬ速さでクラウドの方へ飛びついてきた。

クラウドも一応剣術を嗜（たしな）んでいる身だから、反応速度は悪くないはず（むしろ良い）なのだが、エリーの反射的行動には全く反応できなかった。

この2メートルの距離を一気に詰めるあたり、ただの侍女でないことは確実だろう。

そして突然飛びつかれて硬直したクラウドになど目もくれず、エリーはクラウドの手から首飾りを奪い取る。

……ちなみにだが、『ユマ』とはエリーから首飾りを盗んだ例の白猫の名前である。

命名したのは第三王女のマーガレットだ。

「もうっ、持っているならもっと早くおっしゃって下さいませ。私首飾りの行方が気になって気が気じゃありませんでしたのに！本当に意地が悪い方でございますのね、あなたは」

「……――――っ」

「あら？そんな白目なんか剥いてどうされたのですか？とっても面

白い顔をしていらっしゃいますのね。変顔？」
「…お、お前一回、離れ…」
「え？よく聞こえませんわ。もう少し大きな声で言ってくださいます？」
「だ、だから、離…」
「え、花？花がどうかされまして？」

だめだコイツ。
人の話を聞こうとしない上に、まるで離れようとしない。
田舎の侍女は婚約者や恋人でもない男に平気で飛びつくのか？いや、それよりただの侍女が王族であるこの俺に、何の許可もなく触れてくることがまず可笑しい。
これが俺でなく、もしジェイド兄様だったら間違いなく処罰ものだぞ、女。

などと心の中で思うものの、声にまでは至らずわなわなと口を動かすだけに終わった。

「ああ、そうですわ。私すっかり忘れていました。そろそろ食事の時間なので戻らなくては」

パッとクラウドから離れると、エリーはそう告げた。
やっと離れてくれたことに安堵しつつ、クラウドはエリーを睨む。
この女のおかげで今日は散々だ。本来ならば近くに女がいるだけでもよろしくないのに、今日一日でどれだけ近寄ったことだろう？というか、何度触れ合ってしまったことだろう？
今この場で吐いていないことが奇跡だ。

「…先ほどは失礼な物言いをしてしまって申し訳ございませんでした」
「全くだな」
「あら、離れた途端に元気になられましたわね。さっきまでカタコトでしたのに」
「お前本当に反省する気はあるのか？謝った矢先にそれか？」
「申し訳ありません。私、基本的に思ったことをすぐ口に出してしまうタチでして。直そうとは思っているのですけれど、性格というものはなかなか直らないものですのね」
「俺が思うにお前の努力次第だと思うが？」
「実は私もそう思います」
「……」

だったら直せ！！
クラウドは叫ぶ気力も無くし、はぁ…とその場でうな垂れた。
何故だろう？口喧嘩ではこの女に勝てる気が全くといって良いほどしないのは…――。

◇◆◇◆◇

エリーとの別れは意外とあっさりしたものだった。

第００９話　（作成中）（後書き）

今回はクラウド視点で書かせていただきました。
なのでエミリアは侍女名の『エリー』となっております。色んな人の視点によって呼び名がコロコロ変わりますのでお気をつけくださいませ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5672u/

エキセントリック・パーティー

2011年11月18日14時04分発行